

令和元年度 第5回 昭島市社会教育委員会会議・要点録

開催日時／会 場 令和元年8月29日（木）午後7時00分～9時00分 昭和会館
出席者 谷部議長、中村副議長、齋藤委員、長瀬委員、稲垣委員、松本委員、
吉村委員
欠席者 佐伯委員、二ノ宮リム委員、濱田委員
事務局 川崎社会教育係長、来住野社会教育主事

1 開 会

＜配付資料＞

- 資料 1-1 第4章 昭島市における地域の活性化に向けての提言
- 資料 1-2 昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について（建議）（抜粋）
- 資料 1-3 第3回市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議アンケート
まとめ

- ・昭島市月間行事予定表 9月
- ・とうきょうの地域教育 NO.136
- ・昭島市制要覧 2019
- ・あきしまの教育 第97号
- ・江戸の和算から学ぶ Part.5

2 議 題

（1）第30期社会教育委員会会議のテーマについて（資料 1-1、1-2、1-3）

議 長 我々が実施している「あきしま会議」のもとになっているのが、平成26年9月に出された建議「昭島市における地域の活性化に向けた社会教育」にあるように思う。特に建議の第4章では、非常に地域の活性化に向けての提言としてかなり具体的な案が出されているので、それを一通り検証してはどうかと思っている。

委 員 この建議第4章の最初の「市民の力を借りる」で述べている「①地域について語り合う場を設ける」というのは、実際の建議を見るとわかるが「元気都市あきしま」という言葉に込めた、市長や行政がイメージしている昭島について市民を交えて話し合ったら、市民も「こういうことができる」「協力できる」という話になるのではないか、という発想からこのような意見を出したと思う。これまで3回実施したあきしま会議を通して、市民の声・ニーズを拾い上げながら地域の活動に活かすということをやっているが、そこに、もう少し行政が具体的に入って市の思っていることがどんなことかわかれば、別の形で市民の協力が得られることが期待できると思う。こういう場合は、今のところまだないということになるかと思う。「地域の成り立ちを学ぶことは、地域を知ることでもある」とあるように、地域への関わり方も、結び付けられれば良い。

委 員 私の地域は歴史や伝統行事はないというところから、現在の地域のお祭が始まったの

で、中には神輿を持たない自治会もある。地域に子どもたちを根付かせたいという学校長がおられ、年末の夜の防犯パトロールに参加させたいというお話が出たこともある。子どもたちにとって、そういうところで活躍して褒められるというのはいい経験だと思う。

委員 地域に根付く要因の一つだと思う。

委員 地域に子どもたちが必要とされることは大切だ。継承できなくなる。

委員 どの祭でも子どもと若者がいないと、つまらないものになる。

委員 地域の夏祭りに5か所回ったが、子どもたちがいるところは活気があるし、また子どもがいると保護者もいるという印象を受けた。ある地域のお祭は市民の屋台の売り子や中高生がやっていて、いいものだった。

委員 「若い力を活用する」というところが一番重要なのではないかと思った。また、地域から子供をなくしてはだめだと感じていて、先の話にもあったように、子どもが来るとその保護者も来るので、参加者が倍になる。また、一度地域に来た子はまた戻ってくる。若い力を活用するということで何かできないだろうか。それから、「人材育成と支援者集団」という面では、子どもの親は忙しくて支援者集団になり得ない。それができる人は誰かとなると、子育てを終えた世代が該当するのではないかと思っていて、支援者集団を今まで私たちや地域はどこに求めていたか、そのターゲットが決まっていなかったのではないかと思っている。今回近隣の子ども会が解散して、お祭で子ども会の模擬店の出店がなかった。そうすると、お祭に子どもが来ないのではないかということになり、防犯防災部がかき氷、老人会がヨーヨー釣り、子ども会を卒業した親たちが景品くじをやってくれた。子ども会が無くなったら、シニア世代に支援を求めるしかないかと思う。支援者集団は、シニア世代に、見守るというよりもプロとしてやってもらうというのはどうだろうか。

委員 子ども会が無くなってしまうのは、保護者が大変だからだろう。中・校生の若い力を活用するというものもあるし、子ども会を大人が運営するのではなく、青少年が運営し、それを受け継いでいくような形ができるのではないか。かつて、高校生の頃のことだが、ボーイスカウトの活動費を保護者に出してもらったのではなく、自分たちで何とかしようと東中神の団地の夏祭りで金魚すくいなど、道具は大人が揃えてくれたわけだが、その模擬店を責任持ってやることができた経験がある。若い力を活用する手法を考えてもよいのではないか。

委員 青少年フェスティバルの時なども、子どもたちは一生懸命自分の校区のものを工夫しながら売るなどしている姿を見る。自分たちで発想してやっていると思うので、その力を活かしてあげられる場も必要だと思う。

委員 大人の考え方として、大人が準備して子供会をやると考えているということかと思う。それを変えればよかったのだろう。先の子ども会の例では、発想の転換が必要だったのだろう。

議長 情報の伝達というところと関連付けて、先日の「あきしま会議」に参加できなかった方と会った際に、どんな報告があったか話したところ、「それは聞きたかった。事前に

どんな話が聞けるのかわかっていたら、そちらを優先したのだが」ということを言われた。例えば、IT の活用として、事前に情報を届けることができればよかったのではないか、出席する機会になったのではないかとも思った。一方出席者のリストになくても当日参加された方もある。

議 長 武蔵野市の一般社団法人 武蔵野市観光機構によるイベントカレンダーは、インターネットでいろいろなイベント情報を見ることができる。昭島市では広報あきしまからの情報が主となっている。

委 員 若い人は自分の気に入った情報しか取らない。常に表示されるように、ツイッターも1度上げておけばよいというものではなく、一日に何度も上げて、ようやく若い人も見てくれる感じだ。それを広報でというのはなかなか難しいことだ。IT という情報は難しい。

委 員 SNS も仲間内のものくらいしか見ない人が多い。最近くじら祭りなどで市の広報の方が「# (ハッシュタグ)」をつけてツイートしてくださいという呼びかけをされていた。広報の方だけでなく、そこにいる人がそれをすれば、いろいろなところから情報にたどり着くと思うので、イベントの情報を届けられるかもしれない。若い世代にはよい方法ではないか。

委 員 最近は# (ハッシュタグ) をたくさんつけると、どこかでその情報を拾って見てもらえるようになる。

議 長 あきしま会議で聞いた話から、つながっていくケースもある。

委 員 街なかの掲示板は、自治会、企業、公民館のものなどさまざまな掲示板があり、それぞれの目的で情報を掲示する。市内にいつ、どこへ行っても同じものを見ることができるといふ目に触れる機会が増えるとよい。縛りのない掲示板があるとよい。

議 長 新しい「アキシマエンス」(教育福祉総合センター) でそういうものがあるとよい。

委 員 スーパーでは、お客様用掲示板があつて、お客様から発信する情報があつたりするが、その情報が本当かどうか分からないということがある。

委 員 アナログのやり方として、情報の届け方のフォーマットを一致させるというのも一つの方法だ。また、今は写真を撮って帰ればよいだけだが、切り取り式の連絡先がついているチラシなどもある。スマホを持っていない人たちが、情報を持ち帰るという意味でいいと思う。貼った方も、何人ぐらい持って帰ってくれたかがわかるようになっている。フォーマットのアイディアも行政が出してみるのも面白いのではないか。

委 員 何人が持って帰ったか把握できるというのはよいと思う。

議 長 テーマはなかなか簡単に決まらないが、また皆さんからもご提案いただきたい。

(2) 視察研修について

議 長 今期のテーマの内容にもよるが、視察先の候補も上げていきたいと思う。

※事務局からこれまでの視察研修について説明

※来月日程調整などを行いたい。

報 告

(1) 小学生国内交流事業について

委 員 8月第1週目に岩泉の子供たちを昭島に迎え、3週目に昭島の子供たちが岩泉に行った。社会教育委員は昭島に岩泉の子供たちが昭島に来たときに関わった。去年はパレードができなかったが無事パレードは行われた。5年生の時に参加した子供で、去年パレードができなかったから今年もう一度交流事業に参加して、「今年こそくじらを引っ張るんだ」と言う子供が何人か居て、彼らが無事にできて良かった。行事としては例年通り、迎え入れてホームステイをしていろいろと活動したという感じで、特に滞りなく終わったと聞いている。来年はオリンピックがあり、くじら祭りの日程がどうなるか決まっていないという事情もあり、今のところ来年はやるという方向だが具体的にいつごろ、どうやって受け入れるかはまだ決まっていない。岩泉のほうは受け入れられるということと話は固まっているが、これからどうしていくか年度末に向けて決めていく。

委 員 くじら祭りで大きくじらを引っ張るのは国内交流事業で参加した小学生たち。昭島の子供と岩泉の子供はそれぞれ別の色のTシャツを着ていて、くじらをずっと引っ張っていく。今回、初顔合わせのときに岩泉の子供2人が、地域の伝統芸能の踊りを見せてくれた。地方では地域に密着した行事を伝統的に長年受け継いでおり、地域の行事への参加率が高いのではないかと感じた。伝統行事をやるためには、半年や一年かけて地域の大人からみっちり教えられて身につけていくものだ。時間のかけ方が違うし、地域との関わり方も違うということを感じた。

委 員 6年生の女の子が踊ってくれて、体育の授業で地域の大人が教えてくれたもので、発表の場は地域のお祭りだったということだった。

来年の本事業の実施について、オリンピックに少しでも関われるような経験など、様々な案が出ている。岩泉では夏休みが昭島よりずっと短いので、先方の夏休みに合わせるとなると実施時期がオリンピックと重なってしまうことは避けられないと思う。

次回

9月19日(木) 午後7時より 昭和会館

10月24日(木) 午後7時より 市役所202会議室

※視察研修は、1月か2月、金曜日・土曜日で実施予定